

スウェーデンにおける就学前クラスの意義と役割 —就学前クラスカリキュラムと実践の検討を通して—

大城 愛子

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

The significance and roles of preschool-class in Sweden : A study on preschool-class curriculum and practice

Aiko OSHIRO

Department of Education, Faculty of Education, Kio University
(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara, 635-0832, Japan)

要約 本稿では、6歳児が1年間の就学準備教育を受けるスウェーデンの就学前クラスに焦点を当てて、そのカリキュラムの内容と就学前クラスにおける実際の活動について検討した。その結果明らかになったこととして、義務教育である基礎学校が始まる際に児童が授業に向けて準備ができているなど、遊び中心の就学前学校から学習中心の基礎学校への接続の役割を果たしていること、多文化社会のスウェーデンにおいて、異なるバックグラウンドをもつ子どもにとって就学前の活動の意義が大きいことを挙げた。一方で、2018年から就学前クラスが義務化されることから、質の確保という点で担当教員の資格取得の現状に課題があることを指摘した。

Keywords：スウェーデン 就学準備教育 接続期 保幼小連携 6歳児

1. はじめに

本稿の目的は、スウェーデンにおける就学前クラス（försköleklass）においてどのような活動がいかなる目的をもって行われているかを明らかにすることにより、就学前の保育・教育と義務教育の連続性の望ましいあり方について考察することである。

スウェーデンでは1990年代に保育所（daghem, dagis）と幼稚園（kindergarten）がすべて就学前学校（förskola）へ統合されて、管轄が学校庁に一本化されたことで、幼保一元化が達成された。また、1998年には就学前学校カリキュラム（Läroplan för förskolan, Lpfö98）が策定され、就学前の保育・教育は全国的に統一的な基準と目的をもって実施されている。そして、就学前学校と基礎学校（grundskola）¹における学びをつなげるために重要な役割を果たしているのが、基礎学校に併設されている就学前クラスであり、これは就学前学校を卒業した6歳児が1年間の就学準備教育を受けるものである。この期間を設けることにより、その後の義務教育へスムーズに接続させることと学習効果を上げることが目指されている。

日本においては、制度上は未だに幼保一元化が達成されておらず、小学校就学前の子どもの過ごし方は、

保育所、幼稚園、認定こども園の三種の施設によって異なる。また、就学前の子どもの保育・教育内容に関する基準も、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の三種が存在しており、それぞれの内容に共通点が多いとはいえ、小学校就学前に統一的な活動が実施されているとはいえない状況である。そのため、幼児期の活動と小学校教育とのギャップが大きく、入学後に小学校での生活にうまく順応できない、いわゆる小1プロブレムの問題が学校現場における課題となっている。そうした中で、園児による小学校見学や行事の経験、教員同士の交流や相互理解の機会を設けるなどの保幼小連携の取り組みが推進されているところである。しかしながら、地方公共団体や学校によりその取り組みへの温度差が大きく、日本においては就学に向けての活動が制度的に確立されていないのが現状である。一方で、幼児教育の無償化に向けた議論も行われており、いかにして小学校就学前の子どもの学びや活動を効果的に実施していくべきかが今後の課題であり、スウェーデンの就学前クラスの取り組みは一つのモデルケースとなりうるであろう。本稿では、就学前学校から基礎学校へのつながりとして就学前クラスがどのような役割を果たしているかについて、まず就学前の保育・教育制度の概要

を述べた上で、就学前クラスカリキュラム（Läroplan för förskoleklassen）および就学前クラスにおける実践例から明らかにしたいと考える。

2. 就学前の保育・教育制度の概要

スウェーデンでは、子どもが生まれてから最低1年間は父親または母親が育児休暇を取得することになっており、0歳児保育は実施されていない（学校庁a）。そのため、就学前の保育と教育は、1歳から5歳の子どもを対象として就学前学校で行われている。就学前学校の特徴的な点は、1歳を生涯学習のスタートと見なし、可能な限り多くの子どもに就学前学校での活動を保障しようとしているところである。就学前学校に通うためには、まず保護者の就労状況に合わせて保育・教育時間が決められ、その時間と世帯収入に応じて保育料が算定されるが、保護者の就労だけでなく通学も正当な理由として認められる。保護者が失業または休職中であっても、週最低15時間通うことができる。また、「すべての人に就学前教育を」という理念のもとで、保護者の就労の有無にかかわらず3歳児から5歳児は年間525時間が無料で提供される。

このように、就学前学校を可能な限り多くの子どもに保障しようとする背景には、スウェーデンの福祉国家モデルがある。第2次世界大戦後のスウェーデンは「国民の家」思想のもとで福祉国家路線を拡大していったが、その中で子どもは保護者だけのものではなく社会のものとして育てるという子ども観が根付いていった。つまり、子どもは比較的早い段階から集団での生活やかかわりを経験するべきであり、保護者のみによる子育てはむしろ子どもの発達保障という観点からは望ましくないとするものである。この子ども観は、1960年代にスウェーデンが経済成長期を迎え、労働力不足から女性の労働を推進する中でますます強化されることとなる。さらに、現在では家庭の様相も様々であり、貧困や移民のバックグラウンドをもつ家庭、養育態度に問題のある家庭など、家庭での養育に差が大きいことが問題視されている。そうした家庭で養育される子どものためにも、すべての子どもが様々な経験を共有できることが大切であるという学習権保障の観点から、集団での生活経験と遊びや学びを保障しようという動きにつながっている（教育省）。こうしたことから、生後約1年間の家庭での養育の後は就学前学校で多様な経験を積むこと、保護者が就労・通学していない場合も3歳児以上は一定時間を無料で提供しているのである。

表1. PISAにおけるスウェーデンの順位

	読解力	数学的リテラシー	科学的リテラシー
2000	9 位	15 位	10 位
2003	8 位	17 位	15 位
2006	10 位	21 位	22 位
2009	19 位	26 位	29 位
2012	36 位	38 位	39 位
2015	17 位	24 位	27 位

出所：OECD PISA データウェブサイト

就学前学校における活動は、1998年に策定された就学前学校カリキュラムに基づいて行われている。就学前学校カリキュラムは2010年に大幅に改訂され、2016年にも一部改訂されており、2018年に再び大幅な改訂が行われる予定である。現在のカリキュラムの中では、「言葉」や「数」といった教育的な要素に焦点が当てられており、日常の保育の中で教育的な要素を取り入れることが推奨されている。その背景として、就学前学校が保育だけでなく特に教育面で成果を上げることが期待されていることが指摘できる。スウェーデンにおいては、表1に見られるように、近年国際的な学力調査であるPISAの成績が低迷していることが教育における課題の一つとされており、参加国の変動があるため順位のみで過度に捉われることは好ましくないという一方で、以前と比較すると学力低下は明らかというの一般的な見方である。低迷する学力への対応として2010年から学校教育改革が進められており、その中で、就学前学校は生涯にわたる学びの出発点であり、基礎学校で成果を上げるためには、その前段階の就学前学校での学びを重視すべきとされた。その結果、就学前学校の活動において教育的な要素が積極的に取り入れられるようになったのである。2018年に予定されているカリキュラム改訂に向けては、タブレット端末や幼児向けの学習アプリなど就学前学校におけるICTの活用の推進、遊びと学びの違いを明確化して教育に関わる活動をより明確に定めることなどが議論されており、より教育的な面に重点が置かれる可能性が高い（学校庁b）。

そして、就学前学校と基礎学校における学びをつなげるために重要な役割を果たしているのが、6歳児が通う就学前クラスである。従来、6歳児は就学前学校に通っており、保育・幼児教育制度の中に位置づけられていた。しかし、ベビーブーム期の子どもの増加に伴って発生した就学前学校の定員超過の問題を解決すること、就学前学校と基礎学校を制度上一貫したものにする、当時ヨーロッパ諸国で度々議論となっていた就学年齢の引き下げの問題に対応することなどを念頭に、政府は1998年から段階的に6歳児を基礎学校に移行させ、基礎学校1年生の前の0年生として就学準

備教育を行うように促してきた。基礎学校における義務教育は7歳から始まるため6歳児教育は義務ではなかったが、無償で実施されることから6歳児が就学前クラスに通うことが一般化している。2016/17年度には、全国290コミュニティ²の基礎学校4847校のうち3643校に就学前クラスが設置されており、12万2818人すなわち6歳児の97.8%が通学している（学校庁a）。なお、これまで任意だった就学前クラスは2018年から義務化されることが決まっており、幼児期から義務教育への接続が重視されていることがうかがえる。

3. 就学前クラスにおける活動

（1）就学前クラスカリキュラムの内容

義務教育化が決まっている就学前クラスであるが、ここでの活動が基礎学校での教育と異なるのは、午前中は就学準備教育としてアルファベットや簡単な算数に親しむという教育活動を行い、午後は学童保育に移行するという点である。つまり、半日のみ教育活動を行うことによって、基礎学校での生活に順応し、1年生以降の学びに円滑につなげることが意図されているのである。就学前クラスにおける活動の基準は就学前クラスカリキュラムである。

表2. 就学前クラスカリキュラムの構成

1. 学校の基本理念と役割 基本的価値観 相互理解と寛容 客観性と包括性 平等な教育 権利と義務 学校の役割 発達と学びのための良質な環境 各学校の発展性
2. 就学前クラスの役割、教育目的、中心となる内容 言語とコミュニケーション 創造的かつ美的な表現 数的数理と活動 自然科学・技術・社会 遊び・身体活動・野外活動
3. 全体的な目的と指針 規範と価値観 知識 児童の信用と信頼 学校と家庭の連携 就学前クラス・学童・学校の連携 学校と周囲の環境 評価と成績 校長の役割

出所：Läroplan för förskoleklassen

表2に示す就学前クラスカリキュラムの構成から明らかなことは、基礎学校カリキュラムと同じ学校の価値観と目的をもって教育活動を実施することが求めら

れていることである。まず、1. 学校の基本理念と役割においては、スウェーデンのすべての学校段階において重視されている民主主義的な価値観や平等性への言及があり、これらの価値観が学校制度全体を通じた共通項として重視されていることが分かる。次に、2. 就学前クラスの役割、教育目的、中心となる内容においては、就学前学校カリキュラムでも重視されている言語、数、自然科学といった内容が、より発展的に基礎学校の教科と結びつくような形で提示されており、基礎学校カリキュラムへの接続性が見出せる。また教育的な側面以外にも、多くの就学前学校において中心的な活動である野外活動についても提示されており、就学前学校における活動との連続性も見出すことができる。最後に、3. 全体的な目的と指針においては、家庭、学童、基礎学校との連携について述べられており、就学前クラス全体としての方向性が示されている。

以上のような就学前クラスカリキュラムであるが、実際にどのように目的に到達するのか、どのように活動を構成するのか、といった面については、現場の裁量に任されており、教員の活動に対する自由度は極めて高い。これは他の学校種（就学前学校や基礎学校）における活動についても同様で、同じコミュニティ内でも学校によって教材や進め方が異なるのはもちろんのこと、同じ学校内の同じ学年でも担当教員によって教材や内容が異なることも珍しくない。実際の就学前クラスにおける活動について、次に述べる。

（2）就学前クラスにおける活動の実態—ソフィア基礎学校における調査から—

ソフィア基礎学校（Sofia skola）はストックホルム市内のセーデルマルム（Södermalm）に位置しており、1910年に設立された歴史のある公立学校である。基礎学校9学年と就学前クラスを合わせて約860人の児童生徒が所属しており、スウェーデンにおいては大規模校といえる。この学校を調査先として選んだ理由は、実践が優れている学校として視察や研究授業の受け入れが多く、成功例の一つとして挙げられているからである。ソフィア基礎学校における調査は、新年度が始まって約1ヵ月が経過した2015年9月23日に実施し、朝8時40分の就学前クラスの活動開始と同時にクラス内の活動を記録し、担当教員のIngela Bladhにインタビューをする方法で行った。就学前クラスは2クラスあり、合計54人の児童が通っている。調査を実施したクラスは児童26人、教員2名で構成されている。

表3は当日の就学前クラスの活動内容である。当日の活動順に就学前クラスカリキュラムの中心となる内容と合致するものを抜き出したのが以下の①から④で

表3. ソフィア基礎学校における就学前クラスの活動内容
(2015年9月23日)

8:30	順次登校
8:40	朝の会
9:15	創作活動
	外遊び
10:30	おやつ、読み聞かせ
	創作活動
	外遊び
12:00	昼食 学童保育へ移動

ある。

①言語とコミュニケーション（朝の会）

まず、朝の会では児童に朝起きて最初に感じた匂いを尋ねた。これは、児童が頭の中にあるイメージを実際に発することで、言語化と言葉の整理をすることを目的としている。次にホワイトボードを使って母音(当日はA, O, U, Å, I, Eの6つ)を提示して児童と共に発音を練習し、音とアルファベットの文字を結び付ける活動が行われた。

②言語、創造的かつ美的な表現、自然科学（朝の会）

文字の読み書きを教えてくれる森の妖精からの手紙に、森の中にある長い物／短い物、大きい物／小さい物は何かを尋ねる内容があり、児童はその答えを考えて返事をするという活動である。児童は言語と自然科学の知識を使いながらどのような表現で書くのが望ましいかを考え、教員がそれを書き留めて整理するという形で進められた。

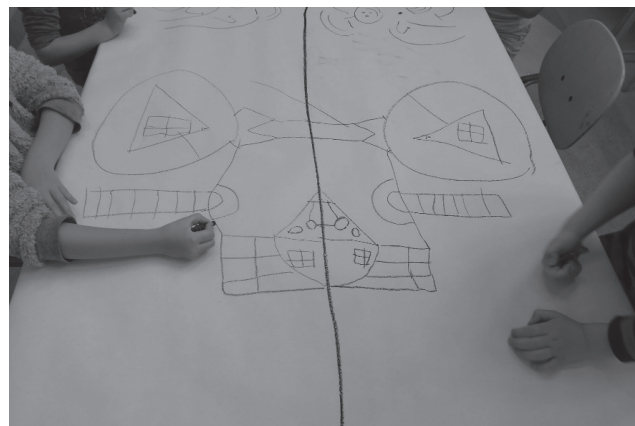
③数的数理と活動（朝の会）

朝の会の最後には、教員がクラスに所属している児童の数と同じ26という数字と当日欠席した4人の名前をホワイトボードに書き、現在クラスにいる人数を $26-4=22$ という計算式で提示した。

④コミュニケーション、創造的かつ美的な表現（創作活動）

児童がペアで向かい合わせに座り、白い紙に自分の描きたい絵を互いに順番に描いていき、相手の描いた絵を自分も鏡写しのように描いていくという活動である。活動中はペアになっている2人は基本的に話をせず、互いに相手の描いていく絵を観察しながら真似ていく。写真では紙に鉛筆で線が描かれているのみだが、この後は絵の具で色付けがされる。色付けは互いに真似をしなくてよい。この創作活動はLevande Verkstad（生きた活動）と呼ばれ、1967年にストックホルムで開発された教育方法に基づく活動である。互いに遊びながら学び、作り上げていく経験を通じて、

相互理解や他者との協力・協調性を身に付けることを目的としている。



(写真：鏡写しの創作活動)

①から④の内容から、就学前クラスの活動においては、就学前クラスカリキュラムで定められている内容が、教科のように明確な形ではなく、横断的に取り入れられていることが指摘できる。また、就学前学校では個々活動として行われることが多い創作活動が、ペアで行われるなど、協調性や相互理解に重点を置く方向で実施されていることも就学前クラスの活動の特徴的な点である。

調査を行った就学前クラスを担当しているIngela Bladhによると、就学前クラスは就学前学校の遊び中心の文化と基礎学校の教育センターの文化が混ざる所であり、活動によって遊びと教育のどちらか片方の要素が強くなることは避けられない。しかし、最終的にうまく基礎学校の1年生につなげることが重要であり、その点ではソフィア基礎学校では効果的に機能しているという。また、就学前クラスが存在することによって、1年生に入る前に学級としての基礎ができることを大きなメリットとして挙げている。基礎学校の1年生としての最初の学期が始まる時点ですでに学級づくりができているので、すぐに教科内容の学習を始めることができるからである。

以上のことから、就学前クラスは義務教育に入る前に1年間という長期にわたって就学準備を行うことができ、基礎学校での学習をスムーズに始める上で非常に効果的なものといえる。遊び中心の就学前学校から学習中心の基礎学校への接続の役割を果たしており、児童にとっては1年間の準備期間があることで新しい生活に馴染みやすいというメリットがある。特に、昨今の移民および難民のバックグラウンドをもつ児童の増加を鑑みると、そうした児童にとって基礎学校開始時点でつまづかないためにも、就学前クラスの活動の意義は大きいと考える。

4. おわりに

本稿では、就学前学校から基礎学校へのつながりとして就学前クラスがどのような役割を果たしているかについて、就学前クラスカリキュラムおよびソフィア基礎学校における実践例を検討してきた。その結果明らかになったことは以下の通りである。

第1に、近年のカリキュラム改訂によって学びの要素が増えたとはいえ、基本的に遊び中心の活動が多い就学前学校から、学習中心の基礎学校へのスムーズな接続という役割を果たしていることである。1年間の就学準備教育によって、先生の話や座って聞く、時間割に沿った活動の明確な区切りに慣れる、文字の読み書きや簡単な計算ができるなど、基礎学校の1年生が始まる際に児童が授業に向けて準備ができていることは、義務教育における学習効果を高める上で効果的といえるだろう。

第2に、多文化社会のスウェーデンにおいて、異なるバックグラウンドをもつ子どもにとって就学前の活動の意味が大きいことである。移民・難民の受け入れの増加（特にシリア系難民の増加）を受けて、地域によっては移民家庭の子どもが90%以上を占める就学前学校や基礎学校が存在しており、そうした学校では語学上の問題や学習面で困難を抱える児童が多い。義務教育段階でドロップアウトした児童が将来失業や貧困といった生活面での課題に直面することも懸念されるため、早期にドロップアウトを防ぐことが重要な課題となっている。そのため、就学前学校から基礎学校での学びに緩やかにつなげていく就学前クラスの果たす役割は大きいと考えられる。

以上のように就学前クラスの果たす役割への期待が高い一方で、課題となるのは質の高い教員の確保である。就学前クラスは、就学前学校教員資格または基礎学校低学年の教員資格のどちらかを所有している教員が担当することになっている。しかしながら、スウェーデンでは長年にわたって無資格教員が学校で教えることを深刻に捉えず放置してきたため、有資格教員が就学前学校でも基礎学校でも不足しており、政府は各大学の教育学部の定員増によって教員養成を進めているところである。2018年に就学前クラスが義務化するのに合わせて教員の確保は急務であり、今後どのような対応が見込まれるのか、注視したい。また、今回のソフィア基礎学校における調査は新年度が始まって1ヵ月時点での調査だったため、就学前クラスの活動は依然として就学前学校の活動に近く、遊びの要素が強いものが多かった。今後は年度末の就学前クラスの活動を調査することによって、基礎学校に入る直前の活動

と教員の配慮、および就学前クラスと基礎学校の連携について探究したいと考える。

引用文献

教育省 The Ministry of Education and Research, *THE POLITICS OF PRE-SCHOOL –intentions and decisions underlying the emergence and growth of the Swedish pre-school* 2007

ウェブサイト

学校庁a Skolverket, Elever i förskoleklass läsår 2016/17

<https://www.skolverket.se/statistik-och-utvardering/statistik-i-tabeller/forskoleklass/elever> 2017年7月12日アクセス

OECD PISAデータ

<http://www.oecd.org/pisa/data/> 2017年7月12日アクセス

学校庁b Skolverket, Förskolans läroplan ska revideras

<https://www.skolverket.se/laroplaner-amnen-och-kurser/forskola/forskolans-laroplan-ska-revideras-1.260355>

2017年10月1日アクセス

ソフィア基礎学校

<http://sofiaskola.stockholm.se/> 2017年10月1日アクセス

注

1 基礎学校 (grundskola) とは、7歳から9年間の義務教育を行う学校のことで、日本の小学校および中学校にあたる。

2 コミュニ (kommun) とは、スウェーデンにおける市町村レベルの基礎自治体のことである。就学前教育から中等教育段階の学校の行政はコミューンが担っている。

謝辞

本研究は、JSPS科研費15K04328の助成および平成28年度畿央大学在外研究による研究成果の一部である。

